

絵本だいすき！

子どもたちと楽しむ 絵本との出会い

大田利歌子

(幼稚園教諭)



『わっしょい わっしょい
ぶんぶんぶん』
かこさとし 作・絵
(偕成社 1973年)

私の園は、自然豊かな田園地帯にあり、三歳から五歳までの園児十数名の複々式保育を行っています。本園のある山口市では「日本一、本を読むまち」を目指した取り組みを進めており、本園では、たくさん絵本に触れ、さまざまなことを感じ、イメージし、一人ひとりの興味を膨らませるきっかけになるように、絵本カードの取り組みを行っています。

最初は、絵本の貸し出しからです。家庭に絵本があまりなかったり、お家の方が読み聞かせをすることがほとんどないというのが私の園の現状でしたので、家庭でも絵本を読んでもほしいと考え、週に一回二冊の貸し出しを始めました。一冊は子ども自身が選び、もう一冊はお家の人が子どもに読んであげたい絵本を選んでもらうことにしました。お家の人の温かい生の言葉で耳にするお話やその時間が、子どもたちには一番うれしいし大切であることを、折に触れ伝えました。

貸し出しが進むと、保護者の方から、かわいらしい挿絵ものや、考えさせられる奥の深い内容のものなどさまざまな絵本の中から、どんな絵本を選んだらよいのか迷ってしまうという声がたびたび聞こえるようになりました。そこで、読んだ絵本の中で、気に入ったもの、子どもが喜んだもの、心に残ったものなどがあれば、互いに知らせあえるよう、「わ

たしのおすすめ絵本」というカードを作ることにしました。カードには、絵本のタイトル、作者、読んで感じたことを自由に書いていただくコメント欄を作りました。そして、カードを読んで共感したり興味を持ったときには『いいね』のスタンプを押してもらうことにしました。携帯のラインやブログなど『いいね』スタンプを押すのがとてもはやっているので、若いお母さんたちには共感するという気持ちの表現や行為としてピッタリなのではないかと思い、カードに取り入れることにしたのです。『いいね』のスタンプは、園長先生が、「ここは私の出番かしらね」と、手先の器用さを生かして作ってくださいました。最初は保護者の方もスタンプを押すのに遠慮気味でしたが、押すほうも押してもらったほうもうれしい気持ちになると、とても喜ばれている姿が見られるようになりました。

お母さんからのお薦めのコメント欄には、

自分の幼い頃を懐かしんだり、読んで感じたりしたことなどが書かれており、それを参考に絵本を借りて帰られるお母さんが増え、「お薦めされてある絵本は全部読んでみたいと思います」と、絵本を借りるのを楽しみにされるようになってきています。

また、子どもたちには、絵本の返却のときに、読んでもらった感想を聞くようにしました。「寝るときに読んでもらったの」「お母さんがこれ読むとき、わざと怖い声で読んで面白かった」などと話をしてくれて、読み聞かせをしてもらうときの様子が伝わってきました。また「ポケットから鳥が出てきてびっくりしたよ」「コンテストの練習をしているところが面白かったよ」などといった絵本の感想も聞かれるようになっていきます。それから「この本、みんなに紹介してあげたい」「この本は僕のおすすめ絵本です」と言って友達に紹介してくれた子どももいます。「おすすめ絵本」

という言葉が子どもが使ったときには驚いてしまいました。が、保護者に向けた取り組みが、いつの間にか子どもたちにも浸透していることをうれしく感じました。

降園前の絵本の読み聞かせも、子どもが紹介したい絵本があるときには、紹介してもらってから読むことにしました。友達が紹介した絵本は反応が大きく、「僕もこの本が好きになった」などという言葉や、「この絵本借りて帰るよ」「あ、僕がおすすめした絵本だ」とうれしそうに子ども同士で会話する姿も見られ、友達から共感してもらうことがうれしく、自信につながっているのではないかと感じています。

私のお薦めする絵本は、かこさとしさんの『おはなしのほん』シリーズ（偕成社）です。自分の子どもの頃に母親に何度も読んでもらったもので、話の面白さに加え、挿絵の表情

や動きが緻密に描かれていて、隅々まで見て楽しんだことを思い出します。子どもたちにもその楽しさを伝えたいと思い、園でもかこさとしさんの絵本をたくさん読んでいます。

このシリーズの中に『わっしょい わっしょい ぶんぶんぶん』があります。音楽が大好きな人々が、それをうらやむ雲の上に住むアクマの嫌がらせに対し、皆で知恵を出しながら前向きに解決し、最後にはより一層音楽を楽しむながら暮らしていくという楽しい話です。この絵本が子どもとつながって遊びとして発展したエピソードを紹介したいと思います。

昨年の運動会では、エンディングにカーニバルを楽しみました。それから、廃材を打ち鳴らしたり、組み合わせてギターや太鼓、カスタネットなど、楽器作りが始まりました。できた楽器は友達に見せたり、音を聞かせたり、「それ、面白い形だね」「僕のは、ちょっと音が違う」と興味も広がって、作り方を

紹介したりもするようになり、まさに絵本の
中のようなへちよっとへんなかつこうのが
つきがたくさん出来上がりました。そんな
とき、子どもたちに『わっしょい わっしょい
ぶんぶんぶん』を読み聞かせました。「私たち
とおんなじだね」と言ったり、楽器を盗む場
面では「絶対また取りに来るよ」と話したり
など、絵本の楽しさを感じている様子が、子
どもたちの姿から伝わってきました。

そんな中、「私たちの楽器も取られたらどう
する?」とYちゃんが言い始めると、「もしか
したら、アクマが見てるかもね」など、子ど
もたちがワクワクした表情で、現実と絵本の
世界をつないで話すようになりました。そこ
で私は、絵本に出てきたアクマのくもの巣に
見立て、天井に楽器を吊るしておきました。
すると「あれ? 楽器がない!」「アクマが取
ったんじゃない?」「どうにかして取り返そう
ぜ」といった絵本の登場人物さながらの言葉

や、「歌を歌う」「風をお
こして吹き飛ばす」「網で
取る」「積み木で階段を作
る」「トランポリンで跳ん
で取る」の五つの作戦が
できてきました。

子どもたちの作戦は、

なかなかうまくいきませんでした。長い虫
捕り網を使って楽器を取り戻すことができた
ときは、「取れた! やったね!」と大喜び。
イメージや目的が共有され、とても楽しい遊
びの一つになりました。

このエピソードのように、絵本を通して子
どもはイメージを広げ、たくさんのかたちを感
じていくのだと思います。園の子どもたちと
保護者の方と一緒に、これからも「わたしの
おすすめ絵本」カードを活用し、お話の楽し
さを広げるとともに、たくさんのかたちとの出
会いを大切にしていきたいと思います。

